

第9 立志の芽生え

以上はいわば小学1、2年頃のことと見ていいだろうと思う。その年頃の予は生来のアレルギー体質であって、いわゆる小児喘息で、冬になれば100日以上咳し通しであって、いくら医者に通ってもちよっとも変わらず、学校の身体検査ではいつも「扁桃腺肥大」の記入があった。滑稽なことには「肥大」をいいこととと思っていたのであった。

さて、予の教師志望は小学3、4年の頃からと思う。それというのも、田舎の純農村のことであって、農家以外で眼に着いたのは①教師②医者③警官であつが、どうしてか医者になりたいとは生涯かつて一度も思った事はない。我が家の南隣は医者であって、村人から一応立てられてはいたけれど、どうしてか一度も医者になろうとは思った事はない。それどころか、半田に新美直とって、幼児より予に目をかけていただいた人があって、「もし医者になるなら学資は出すから……」と何回か言われたけれども、予はついにその気にはならなかった。空しかったことを申し訳なく思う。氏は検定出身であって、ずいぶん苦勞をなされた方のように、東大の初代眼科の河本教授には、宮崎市の杉田正臣氏の父君と同じく、個人的にかなりの親交があったようである。しかもこんな方のご親切なるお言葉にも、ついに予は従わなかった。(氏の予に対してのご懇情の根本には、予の生い立ちを熟知されていたことは言うまでもないし、氏と端山の祖父は同じ村出身であったからである。)

さて、医者のほかには、警官も隣の医者の借家にて、小学校の4年生頃より、毎日新聞を読ませてもらいに行ったが、もちろん巡査にとは、かつて一度も思った事はない。かくして結局教師志望の芽生えは、小学校の3、4年の頃からである。それには尋常小学校時代に校長先生が、家の近くにおられたことも、かなり影響したかと思う。特に奥さんとはいろいろ話をして教わるが多かった。

やがて字の尋常小学校……民家を改造したもので、障子の戸であったが、やがてそれを了え、半田の高等小学校に通うこととなれば、その校長(日比恪)は伯母の主人である義理の伯父であって、この伯父夫妻にはいわば親代わりとして、絶大なお世話になり、かつその感化影響も、蓋し絶大といってよい。しかし「立志の芽生え」という点からは、特筆すべき一事があつて、生涯忘れ得ぬのみか、今なおそ

の夜の情景が彷彿として浮かびあがってくるのである。

ではそれは、どうしたことかと言うと、予の小学5年生の頃かと思うが、予の実母の姉の長女の結婚祝いがあって、予はその席上男蝶女蝶の一方となり、無事役目を果たしての帰り道の出来事であった。(ちなみに言えば、この山口精一氏という人は、予の学資を頂いた方であって、今のお金に換算すれば約200万円であって、農家としてはたとえ地主としても、容易なことではなかったであろうと思われる。)

その夜結婚式の宴が終わる頃には土砂降りとなって、日比の伯父と1台の人力車に乗って帰るとき、車が蓮慶寺の南の竹やぶにさしかかった時、ふと予は近く半田に高等女学校が出来る噂があったから、「それが中学であればいいのに……」と思わずそのことを伯父に話をした。するとその時伯父は夜半、しかも土砂降りの車中であつたにもかかわらず、毅然として予に「たとえそれが中学でも、お前は中学には入れない、師範学校へ入って将来学校の先生にならなければならない」と言い渡され、その時の感慨は生涯忘れ難い。けだし子供心にも、己が生涯の方向に対する決定の宣言と響いたのである。

それは予にとってはな限の寂寥感であつたが、しかしそれは予には、悲痛悲哀の念ではなかつたようだ。それというのも、前述のごとく予は、再三新美直医師から「医者になるなら学資は私が出しますから……」と言われていたが、教師志望を変えようとは考えなかつた。では仮にそのとき、もし医者になったらどうだと言うと、おそらく予は、経済的には困らなかつたであろう。しかし精神的には物足らず、あるいは書画骨董を集めたり、多少の慈善らしき事はしたかもしれないが、これ「神天」の望まれた途ではなかつたようだ。